

# インクルーシブ研修だより

No. 3

2016. 5. 7 杉並区立杉並第四小学校 高橋 浩平

**「わかりましたか」「いいですか」  
をやめませんか。**



5月です。子供の前にこいのぼり。

第2号で、「一般的にインクルーシブ教育とは」というお話をしました。なんだか、やっぱり難しい、という声をいただきました。できるだけわかりやすく心掛けてはいるのですが、まだまだ私の筆力が足りないですね。

さて、今回は

「わかりましたか」「いいですか」をやめませんか

というお題です。

一見、インクルーシブ教育とは関係ないように思われる方もいるかもしれませんが、インクルーシブ教育とは「支援の必要な子に必要な支援をする」といった個別対応的なことのみで行っている訳ではありません。基本は学級経営だと私は思っています。

先日参加したある研究会で講師の方がこのように言っていました。

**「いいですか」をなくすと授業力がアップする。**

これは算数の授業づくりの話の中で出てきたのですが、よく算数の授業で「答えは何ですか?」「〇です」「いいですか?」「いいです」という場面がありますね。そのことについて講師の先生は、次のような話をされました。

先生が「いいですか？」といったときに、子どもは、「あ、これは先生が正解だっていうている」と思うわけです。「よくないですか？」などと聞かないですから。つまり、先生のお墨付きになっているから、子どもたちは「いいです」と自信を持って言う、しかし、そこに子どもの思考があるかという、そこにはない、答えがあつてなのか、間違っているのか、子どもにゆだねることが重要です。「え！」「ほんとうに？」「ぜったいに？」と先生が問うと、自信のある子は「だって〇〇〇だから」と説明してきます。だから考えをメモさせることは大事です。子どもがそうやって主体性を持ちながら授業に参加できるようにすると、先生の授業力も上がってきます。

(研数学館「算数・数学連続セミナー」H28.4.17 細水保宏 明星大学客員教授)

聞いていて、おっしゃる通りだなと。

また、森山徹先生は、杉並区の特別支援コーディネーター研修の中で「隠れメッセージ」を見つけ1つずつ消すチャレンジを」というお話をされています。「隠れメッセージ」とは「教師が意図しない意識しないうちに児童に伝わってしまうメッセージ。教室・授業・対人関係等のルールやマナー、価値観など多岐にわたる。」と説明されています。その一つの例にこんなものが載っていました。

「分かった人？」と聞くことによる隠れメッセージ

→「わかった人？」「は～い」は儀式であつて学習の定着を確認する設問ではない。

子どもたちは次第に手を挙げるのもバカらしく感じるようになる。

いかがでしょうか。「わかりましたか？」「いいですか？」って確かについ使ってしまうがちな、と思います。しかし、「わかった人？」「は～い」という場面を見ていると、先生の自己満足、とも思うのです。

これからの時代に求められる資質・能力とは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」だけではなく、「主体性・多様性・協働性・学びに向かう力・人間性」も求められています。だからこそ「アクティブ・ラーニング」や「ペア学習」が強調される訳ですが、その第一歩として「わかりましたか」「いいですか」をやめることから始めてみるというのではないか、と思っています。

杉四小のインクルーシブ教育とは

「できないことをほったらかしにしない教育」